

巻頭エッセイ

高野辰之と「故郷」

一般財団法人民事法務協会監事 佐藤 努

長野県北東部に人口約 41,000 人、面積 110 キロ平方メートル程の市がある。中野市である。西北に北信五岳の一つ斑尾山を望み、清流斑尾川が町中を流れ千曲川に注いでいる。農業が主産業であり、日本の原風景の趣を今も残している。

この中野市の出身で、唱歌の作詞者として広く知られているのが「高野辰之」であり、生家近くには「高野辰之記念館」が開設されている。かねてから唱歌に興味があったので、昨年、同記念館に立ち寄ってみた。飾り気のない質朴とした記念館には、明治から昭和初期にかけて、その生涯を全うした辰之の足跡が展示されていた。

辰之は、明治 9 年 (1876 年) 4 月 13 日に、父仲右衛門、母いしの長男として水内郡永江村 (現中野市永江) に生まれている。高野家は代々農家であったが、仲右衛門は大変向学心が強く、小布施町にある陽明学者高井鴻山の私塾に、月数回通っていたようで、距離にして片道 12, 3 キロ、途中には千曲川も流れている道程であった。仲右衛門は礼儀正しく謙虚な人柄で、近隣の人びとに尊敬され、辰之には、常々「鴻鶴の志を持て。」と諭していたようである。

明治 20 年 (1887 年)、辰之は地元の永江学校を卒業し、生家から片道 7 キロ程離れた飯山町の下水内高等小学校に進学す

る。子供にとって相当の距離とは言え春から秋までは通学できそうだが、冬は違う。飯山町の冬は厳しい寒さに加え積雪も多く、通学は困難が予想された。仲右衛門は冬季だけでも飯山町に下宿させなければならぬと考えていたところ、偶然、仲右衛門の姉の嫁ぎ先が飯山町の古刹真宗寺の檀家総代であったことが縁となって、辰之は真宗寺に下宿させて貰えることになるのであった。

明治 24 年 (1891 年)、下水内高等小学校を卒業した後、母校である永田尋常小学校 (旧永江学校) の代用教員として勤務するものの、父譲りの向学心抑えがたく、2 年後には、長野県尋常師範学校 (後の長野県師範学校) に給費生として入学している。当時の長野県における最高の教育機関であり、全寮制であった。師範学校では、国語、国文学はもとより、和歌、詩歌の基礎をも学び、約千首の短歌を作って卒業時に恩師や学友に贈呈したとのことである。4 年後に同校を卒業、今度はこれも母校である下水内高等小学校に正規教員である訓導として勤務し、再び真宗寺に下宿するのであった。

飯山町は、寺や仏具店が多い町として知られ、当時「信州第一の仏教の地」と言われる程で、そんな町中にある真宗寺は地元で良く知られていた。辰之と同時代に活躍

した島崎藤村は、明治39年(1906年)、「蓮華寺では下宿を兼ねた。」で始まる「破戒」を出版するが、この「蓮華寺」のモデルが真宗寺である。「破戒」は、日本自然主義文学の先陣を切った作品で、非常に写実的に描かれている。ただ、住職に関する記述だけは事実とは全く違っていた。ふしだらな住職のように描かれ、寺関係者の反発を招いている。

さて、訓導として勤務している明治31年(1898年)、辰之は文部省の中等教員国語科検定試験に合格する。この試験は、通常必要とする高等師範学校での履修をすることなく、中等学校や師範学校の教員になれるものであった。しかし、そのこと以上に重要な出来事が、この時の面接試験の試験官が、東京帝国大学の上田萬年文学博士(現代国語学の基礎を確立した人物。作家円地文子の父。)であったことである。この出会いは、辰之のその後の人生における最大の出来事で、以後辰之は上田博士を慕い、また上田博士も辰之を信頼し、指導し続けるのであった。

この年の7月、辰之は真宗寺の三女つる枝と結婚する。真宗寺は古刹である上に、住職井上寂英は西本願寺門主大谷光瑞との繋がりが強い(寂英の長男弘円は光瑞の西域探検隊に同行している)。誇り高い寂英だけでなくその妻よしえも、辰之の将来に対する期待は相当大きく、辰之もまた十二分にそれを感じ取っていた。義父母の期待に応えるには、上田博士の下で多少なりとも自信のある国語・国文学を研究するしかないと考えたのであろうか、何とも乱暴な話であるが、同年9月に、勤務していた高等小学校に病気欠勤願を提出して上京してしまうのであった。

ところが、上京はしたものの上田博士を

直ぐには訪ねず、当初は東京帝国大学の用務員として勤務し、博士の講義を廊下で聴講するような日々を過ごしている。上京時点では、上田博士と辰之の間に特段の交流がなかったのであろう。だが、時とともに辰之の聴講のことが博士の知るところとなり、また検定試験面接時の好印象も手伝って、博士の研究室への出入りを許されるようになったのである。上田博士の信頼は日増しに厚くなり、翌年には書生になってほしいと請われる程になっていた。

当時、国文学といえば、古事記、万葉集、源氏物語などの古典が主で、江戸文学などは俗文学、軽文学として軽視されていた。上田博士自身も、江戸文学が学問として認知されるまでには相当の年数を要するとの認識であったが、辰之の興味はまさに江戸文学にあり、その研究を辰之が始めることは否定せず、指導・支援し続けていくのであった。

ところで、この当時の辰之の生活は相当厳しく、実家に無心する程であった。しかし、実家においても思うように収益が上がらず、また天候も悪く、苦しい生活を強いられていた。母いしから、父仲右衛門が苦勞しているの、一刻も早く帰郷するよう懇々と諭すような手紙が辰之に届くが、これに対し辰之は、東京で研究を続けたい、いや続けなければこれまでの努力が水泡に帰すと、涙ながらに許しを請うような返事を出している。代々続く農家の長男としても忸怩たる思いがあったろうし、辰之の人生において最も辛い苦しい時代であったように思われる。

しかしながら、東京での研究の日々は長続きしなかった。辰之は尋常師範学校を給費生として卒業しているの、授業料返還免除のためには、高等師範学校へ進学する

か、一定期間県内のいずれかの学校に勤務しなければならなかった。下水内高等小学校には1年半程しか勤務しておらず、長野県から復職への督促状が幾度となく実家に届いていたのである。

万策尽きた辰之は、やむなく上田博士に相談したところ、博士の尽力により、長野県知事の推薦が前提となる高等師範学校への進学は叶わなかったものの、中等教員国語科検定試験に合格していることが考慮されて、母校の長野県師範学校に2年間教諭として勤務すれば、その期間を返還免除の一環として換算することで折り合いがついたのであった。だが当の辰之は学問を続けたいと、この決着に不満であったらしい。渋る辰之に対し上田博士は、研究は戻ってきてからでも可能であるし、将来も責任を持って尽力するから心配無用であると諭したようである。やむなく辰之は、明治33年(1900年)師範学校に戻るのであった。

明治35年(1902年)、師範学校での勤務を終え、辰之は再び上京する。上田博士の計らいもあって、文部省の国語教科書編纂委員に任ぜられるが、この年の暮れに教科書疑獄事件(教科書検定制度の下で起きた贈収賄事件。)が発覚する。これを契機に、明治政府は教科書国定化を一気に推進することとし、任命されていた辰之たち編纂委員(3名と言われている。)は、明治37年(1904年)の新学期までに尋常小学読本8冊全てを完成させなければならなくなった。何とか期限には間に合わせたものの、辰之は、余りに短期間の上に、「標準語」の標記方法すら未だ定かでない中での作業で大変苦勞をしたと述懐している。

小学読本完成後の明治37年(1904年)、辰之は文部省属官となり、これにより、ある程度生活は安定したと思われるが、その

後5年間続く属官生活は、辰之にとって極めて惨めで不快なものであったらしい。

明治政府は、あらゆる分野で急速に西洋文化を取り入れていくが、子供たちへの音楽教育は、教えるための教員、教材、教授法などの諸条件が整っていないとして、その実施を留保していた。課題となっていたのは、五音音階に慣れ親しんできた日本人に対して、どのようにしたら西洋の七音音階を受け入れさせられるかであった。明治40年(1907年)、音楽教育も実施可能になったとして、初めて小学校の必須科目に唱歌科が加えられた。文部省は、小学校唱歌教科書を早急に編纂する必要に迫られ、明治42年(1909年)に小学校唱歌教科書編纂委員会を設置し、辰之はその委員に委嘱されたのである。委員長は湯原元一(当時東京音楽学校校長)、歌詞委員には高野辰之が、楽曲委員には鳥取県出身の岡野貞一(当時東京音楽学校助教授)が加わっていた(委員数等には諸説ある。)。なお、辰之は明治41年(1908年)に東京音楽大学邦楽調査掛嘱託となり、明治43年(1910年)には同大の教授になっている。

小学校唱歌教科書は、明治44年(1911年)5月から大正3年(1914年)6月までの間に次々と刊行され、辰之の作詞としては、「日の丸の旗」(第一学年用)、「紅葉」(第二学年用)、「春が来た」(第三学年用)、「春の小川」(第四学年用)、「故郷」(第六学年用)、「朧月夜」(第六学年用)の6曲が掲載されている。作曲は全て岡野貞一であった。ところで、小学校唱歌教科書編纂委員会は合議制で運営され、唱歌の作者は公表しないこととされていた。国威発揚と教育政策上の必要性から国すなわち文部省が作成することが重要であった。作詞作曲者と

なる委員も理解を示し、特段不満を有していたようには窺えない。前述の6曲が辰之の作詞であった事実は、この当時、親族でさえ知らなかったのである。

では現在、何故作者が特定されているのであろうか。詳細は不明であるが、昭和47年(1972年)に辰之の養女弘子が日本音楽著作権協会に辰之の作詞である旨認めるよう申請し、同協会において著作者特定作業を進めた結果、昭和48年(1973年)になって、漸く前述の6曲が辰之の作詞であると認められたようである。唱歌公表から約60年が経過していた。特定作業は、著作者が死亡しているときは実証する資料が乏しく、特定困難となるケースも多々あるようで、他に辰之の作詞と推測される唱歌も相当数あると言われている。

さて、「故郷」は、前述のとおり尋常小学唱歌第六学年用として、大正3年(1914年)6月に発表されている。歌詞を記してみると、次のとおりである。

- 一 兔追ひし かの山
小鮒釣りし かの川
夢は今も めぐりて
忘れがたき 故郷
- 二 如何にいます 父母
恙なしや 友がき
雨に風に つけても
思ひいずる 故郷
- 三 志を はたして
いつの日にか 帰らん
山は青き 故郷
水は清き 故郷

弘子によれば、この歌詞は、辰之の生家の裏山にあたる熊坂や大持山、それに斑尾川などを念頭に作られたとのことである。岡野貞一の楽曲も穏やかで温かく傑出して、一度聴いたら忘れられない程に素晴

らしい。辰之の育った故郷の山河、慈愛に満ちた両親、家族への思い、共に学び遊んだ友人たち、豊かな自然の中で、人びとに暖かく見守られながら育っていった幼少期への郷愁に充ち満ちている。そして、そのような環境にあっても自らの成長と共に芽生えてきた将来への夢、その実現のために郷里を離れざるを得ない切なさをも包含する。私は人生に対する応援歌のように受け止めている。

私が初めて「故郷」を聴いたのは随分昔のことであるが、その時から、ちょっとした違和感も覚えていた。それは、「故郷」が小学生に対する唱歌であるにも拘わらず、子供達への意識が全く感じられないことである。その疑問を解く記述が、今回読んだ書籍にあった。それは、辰之と岡野が、唱歌作りも最終学年に達したときに、1曲ぐらいは自分達の心境を歌にしたいと願い、その願いが叶って「故郷」が作られたというものである。「故郷」には、二人が抱く素直な、或いは切実な思いが詞に、曲に込められていたのであった。だが、この歌の持つ奥深さなのであろう、不思議なことに子供たちにも受け入れられ、歌い継がれていくのである。

大正9年(1920年)、唱歌教科書編纂委員を解かれた辰之は、東京音楽学校の教授専任となり、漸く念願であった日本歌謡に関する研究著述に専念できるようになった。ところで、「日本歌謡の研究」とは如何なるものであろうか。門外漢にとっては甚だ説明困難であるが、後日完成した研究論文「日本歌謡史」によれば、「喜び又は悲しみに対する叫び声が歌謡の起原」と定義し、序説において「歌謡といふ語は、音楽に於いては歌を伴う小曲の謂で、或一定の形式を有するものとして考えられ、文学

に於いては曲節を附して謡う詩として考えられる。よって歌謡史なるものは文学と音楽との中間を縫って、相互の交渉を説きながら史的叙述すなわち起源と発達と変遷とを叙すべきである。」と研究の方向性を明示している。更に、「其の足跡は文学として考ふべきもの、すなはち文句の上に多く存在して、音楽として考ふべき其の曲の伝つてゐるものは十に一にも達しない。」と研究の困難性にも触れている。時代区分は、通常の歴史区分とは異なり、上古時代、外来楽謳歌時代、内外楽融合時代、邦楽発展期、邦楽大成期（前半）、邦楽大成期（後半）、邦楽革新期（明治以降）の7つに整理し、その時代時代における歌謡、例えば五七調の起源、長唄、短歌、神楽歌、田歌、催馬楽、浄瑠璃等々実に広範な対象の原典や歌詞を丹念に収集・引用し、考証を加えているのであった。

研究論文「日本歌謡史」は1000頁を超す大冊となり、東京帝国大学に提出された。これに対し大正14年（1925年）、東京帝国大学から文学博士の学位が授与され、昭和3年（1928年）には帝国学士院賞（現在の日本学士院賞）を受賞し、更に、天皇皇后両陛下に「日本歌謡の変遷について」と題してご進講申し上げる栄誉も賜ったのである。辰之は、ご進講を記念して、研究の為に長年月を要して収集した古文書や文献、書画骨董の類などを納める書庫「斑山文書」を東京代々木の自宅に建立したのであった。

明治31年（1898年）に故郷を離れ、上田萬年博士を頼りに上京してから、約30年間取り組んできた学問的業績がやっと認められたのである。この間の心境について、「日本歌謡史」のはしがきに「此の方面の研究に関しては、指導を受くべき先輩もな

く、相談すべき友人も無かったので、私は常に茨を分けて無人の境に入込むやうな覚束なさのみを感じてゐた。口には強そうなことを言っても、心の底にいつも淋しさが横たわつてゐた。永年かけて調べた結果が、一枚の古文書の発見と共に崩れたこと、苦しい工面の下に史料探訪に行けば、先年あったものが散逸してゐて、何の獲物もなく炎天に数里の途を徒歩したこと、珍貴な参考書を書肆の店頭に見て、購入費に奔走してゐる間に、富豪の手に買去られて、其の借覧の為に苦心を極めたこと、かうした思出は際限もなくある。」と記している。

昭和9年（1934年）、辰之は、郷里に近い長野県野沢温泉村に別荘を購入している。旅館の別館だった建物で、庭には植え込みや池があり、落ち着いた二階建ての山荘であった。辰之は、この建物に「対雲山荘」と名を付し、避暑等に利用していたが、還暦を期に公職を辞し、昭和18年（1943年）、東京での生活に別れを告げここに隠栖している。日本は第二次世界大戦の真っ直中にあつた。終戦間もない昭和22年（1947年）1月25日、雪深い野沢温泉の「対雲山荘」で、家族、友人、知人に囲まれて、国文学者高野辰之は71年に及ぶ人生を閉じたのである。

平成2年（1990年）、東京の「斑山文庫」に納められていた辰之の著作や貴重な文献・書画がご遺族から野沢温泉村に寄贈され、同地にそれらを収納した「おほろ月夜の館（斑山文庫）」が開館された。館内のパネルには「辰之の学問は、日本人の魂や精神が各時代の中で如何に生きて来たか、その姿を明らかにしようとしたものである。」とある。辰之の孫文子の夫である芳賀綏氏（日本語学者。東京工業大学名誉教

授。)は、このパネルを指さして「これこそ辰之の学問ですよ。」と指摘している。「日本歌謡の研究」の本旨は、まさにここにあったのである。平成8年(1996年)、大正大学において高野辰之没後50年記念のシンポジウムが開催され、国語学者金田一春彦氏が講演されている。その講演において、子供時代に愛唱した歌のアンケートを実施してみたところ、「巷番多かったのが『故郷』でありました。二番目が『朧月夜』で、この二つが日本のすべての人から愛唱されたものなんですね。」と話され、更に、「日本人に、日本に生まれてよかった、この素晴らしい国土に生まれ、素晴らしい日本民族の一人として自分は生まれたという自覚を持たせた詩人といったら、私は高野辰之博士が一番だと思うんです。」と辰之を讃えている。平成10年(1998年)2月22日、長野冬季オリンピック閉会式が長野市オリンピック・スタジアムにおいて執り行われた。センター・ステージに歌手の杏里が立ち、5万人の観衆とともに辰之の「故郷」を熱唱している。「故郷」が誕生してから80年以上の時が経過していたが、日本の国民的愛唱歌として生き続けていたのであった。「日本歌謡史」の中で、将来の邦楽は如何にすべきかとの課題に対し、辰之は「考ふべきは、それが日本国民の上に建設されたものであるか否かの一事である。」と明言している。

この3年間、世界中がコロナ対応に振り回され続けた。その間、会わずにいるうちに、会えなくなった多くの方々を思い出すと胸が締め付けられる。五里霧中であって心が荒んでいくように思えた。マスメディ

アは表層的な事象を直情的に報道していたが、それにより何が得られたのであろうか。一日も早く穏やかな日常を取り戻したいと思っているときに「高野辰之」に出会ったのである。まるで登山電車に乗っているかのような、各駅停車で、時にはスイッチバックでもするかのような前半生、しかし夢を決して諦めることなく追い続け、頂上に辿り着いた後半生、その間、辰之は愛情深く日本人の心を見つめ続け、また寄り添い続けていたのであった。そのような辰之の生き方に触れることで、少し心が救われたように思われた。

(注)最後に、参考とさせて頂いた主な書籍をご紹介します。

- ・「定本 高野辰之 その生涯と全業績」監修・芳賀 綏(発行所 株式会社郷土出版社)
- ・「物語 高野辰之」著者・畑 守人(発行所 鬼灯書籍株式会社)
- ・「葉の花畑に入り日うすれ 童謡詩人としての高野辰之」著者・三田英彬(発行所 株式会社理論社)
- ・「唱歌誕生 ふるさとを創った男」著者・猪瀬直樹(発行所 株式会社小学館)
- ・「志をはたして 高野辰之 その学問と人間像」編集・野沢温泉村斑山文庫編集委員会(発行 野沢温泉村教育委員会)
- ・「信濃教育(第1164号 特集 高野辰之の人と業績)」(発行所 信濃教育会)
- ・「日本歌謡史」著作者・高野辰之(発行所 株式会社春秋社)